

研究ノート 紀広成の画業とその周辺

岩佐伸一

Study Note on Kino-Kôhsei

Shin'ichi IWASA

1. はじめに

美術史家・土居次義氏の「岸竹堂について」(注1)という文章の中に次のような一文がある。

わが国の過去の芸術家の中には意義深き業績を生みながら、その生存中に認められなかった作家も多いが、また生存中に於いては認められていながら、後の人びとから忘れられて了つた勝れた作家も尠くない。

氏は続けて岸竹堂の作品と生涯について論を展開されるのだが、この言葉は在世中は活躍しながらも、現在では顧みられる人々も少なくなった近世後期京画壇の画家たちにも当てはまるのではないだろうか。

ここに紹介する紀広成(1777-1839)もまさにそのような画家のひとりである。彼は、従来より呉春(1752-1811)の弟子とされ、岡本豊彦(1773-1845)、松村景文(1779-1843)、柴田義董(1780-1819)らとともに絵を生業としていたものの、現在に至っては他の三人に比べるまでもなくその存在が知られていない。しかし、全く逸伝というわけではなく、当時はひとかどの画家として認められていたことは、京都の学芸分野の紳士録である『平安人物志』にも頻繁に掲載されていることからうかがえる。

戦前までは画家辞典の類には必ず見られたものの、現在になってはかなり影が薄い。よってその作品の存在さえあまり把握されておらず、研究はおろか作品紹介さえほとんどされていないのが現状である。(注2)本稿は、このような状況にある紀広成研究における第1段階として管見の限り知り得た資料と若干の考察を示そうとするものである。

2 伝歴に関して

広成の生涯をたどることのできる基本的な資料は、彼の遺した作品を除くと管見の限りではわずかに2件を挙げることができるにすぎない。まず第1に『画乗要略』に記されている広成伝である。この書物は岸駒に画法を学んだ白井華陽の手になり、天保2年(1831)の序を有するところから、広成在世中の記事として信用できるものと思われる。内容は、大まかに次の4項に分けられるが、広成伝のすべてを合わせても200字にも満たないものであり、そう詳しくは記されていない。

- ① 広成の画歴に関すること
- ② 弟子に関すること
- ③ 広成の人となりに関すること
- ④ 広成筆「阿弥陀三尊」に関すること

ここでは広成が、京都の人でありはじめ呉春についたものの、後には唐代の画家・呉道子に倣うようになったとの事柄しか広成の伝歴に関する情報は記されておらず、その生年や出自などの基本的なところには触れていない。しかし、現在では全く知られなくなった彼の弟子達や、日頃から仏教を篤く信仰し、本職の僧も顔負けの生活を送っていたという、同時代ならではの情報もあって注目される。

さて、もうひとつ参考になる資料がある。それは、京都市東山区の実報寺に現存する広成の墓碑であり、銘文は貫名海屋(1778-1863)の撰と書になり、全面で213字が刻まれている。(注3)

ここにも出自や生年は記されていないが、天保10年(1839)に数え年63歳で没したと刻まれているところからして、その生年が安永6年(1777)であることがわかり、この他は、ほとんどが広成の人となりについて述べられている。例えば呉春の没後、その弟子達が互いの優劣を争うのを見て嫌気がさし、今まで学んできたものを捨て、独自の画境に至ったことや、弟子には自らの画風を押しつけることなく、その才能のままに描かせたことなどが記されている。また、「生来不蓄妻妾」とあるように、一生独身であったため子が無かったが、甥(銘文では「姪」の字が使われている)の澤渡精斎(紀広繁)やその子澤渡素軒(紀広孝)も画業にかかわっており、血縁・画系とも多少は後代に繋がっていたことがわかる。

以上、生没年とその人となりは知ることができるものの、出自やいつから絵を学び始め呉春についたのか等はわからない。ただ、詳しくは後で述べるとするが、寛政10年(1798)1月の賛がある作品が確認されるところから数え年22歳の時点で既に画家として活動を開始していたことがわかる。以下、後述の項と重複するが、簡単に画業を中心とした広成の生涯をたどっておく。

安永6年(1777) 京に生まれる。

寛政10年(1798) 広成作品の初見。([大調義順像])

享和4年(1804) 『狂歌きき徳利 竹葉集』に挿絵を描く。

- 文化6年(1809) 『狂歌ふくるま』(3月序)に挿絵を描く。
11月「己巳展観」に出品。
- 文化7年(1810) 3月「芦雪翁追薦展観」に出品。
- 文化8年(1811) 7月呉春没。
- 文化9年(1812) 『京城画苑』に掲載される。
- 文化10年(1813) 『平安人物志』(11月刊)に掲載される。
- 文化11年(1814) 鈴木月橋主催の展観に出品。
- 文化14年(1817) 呉春没後7回忌記念展観「流芳遺事」に「参校」「幹事」として名を連ねる。
- 文政5年(1822) 『平安人物志』(7月刊)に掲載される。
- 文政13年(1830) 『平安人物志』(10月刊)に掲載される。
祇園祭の長刀鉾髹股彫刻の下絵を描く。
- 天保4年(1833) 「烟雲供養新古書画展観」に出品。
- 天保8年(1837) 9月小栗豊水主催の展観(「墨林嘉栗」)に出品。
- 天保9年(1838) 『平安人物志』(5月刊)に掲載される。
- 天保10年(1839) 8月23日没。京・烏辺山に葬られる。

以上が管見の限り知り得た広成に関するところがらであるが、途中より四条派と一線を画し、それ以降積極的に特定の画派に属さなかったためか、御所造営などの公的な事業にも名前が見られず、その事績の全貌も掴みづらいのが現状である。

3 京画壇の中の広成

広成が生きた18世紀後半から19世紀半ばの時代は、絵画の享受者層が大幅に広くなり、公家、大名、寺院だけではなく富裕な農民や町人もその購買者に加わることとなった。また、出版物の刊行も一層盛んになり、挿絵はもとより絵手本や画譜類の出版により画家の出る幕も多くなった。

本章では「出版物」を中心としたメディアに登場した広成の名を拾い、京画壇の中にどのような位置を占めていたのかを知るために「全体の中の広成」を示す同時代資料を取り上げる。

『平安人物志』への登場

近世京の学芸分野の紳士録である『平安人物志』は、明和5年より慶応3年まで現在のところ9回発行されたことが確認されている。掲載されるのは、医・儒・詩・書・画など学問・芸術分野の大半をカバーしている。さて、広成の在世中には天明2年版、文化10年版、文政5年版、文政13年版、天保9年版の計5回の『平安人物志』が出版されており、このうち、広成が未だ6歳であった天明2年版を除き、他の4冊には全て広成の名が掲出されている。この書はもともと名簿的な要素が強く、個々に関してはさほど情報量は多くない。しかし、画家に限ってみても当時京で活躍していた人々の多くが掲載されており、その順序に何らかの意図があるとすれば全体の中での個人の位置が見える可能性もある。試みに文化10年版を見てみると、画の部には合計73名が挙げられており、筆頭は土佐、次いで、鶴澤、京狩野、山本、岸、勝山、円山、原、吉村の各家の頭領とその子が掲載されている。本書の序文において「則綴之全無秩序」とあり、順列に意味はないと言明しているものの、宮中絵所預の土佐家が筆頭で、続いて禁裏御用絵師の鶴澤家が挙げられ、それに続く京狩野、山本は当時のアカデミズムを代々守り伝えてきた家であり、かなり格式を意識した配列と言わざるを得ない。さらにそれに続く各家も、前出に比べると新興の勢力ながらも各々権力者層と結びつきを持ち、御所や大寺院造営などの公的な事業に関わっている。ここまでみると順列にはある程度の意図が読みとれるのだが、52番目に名の挙がっている広成の前後までくると明確な順列の意図を指摘することは難しい。試みに前後の数名を挙げると、亀岡規礼(円山派)、矢野夜潮(円山派)、土岐濟美(円山派)、橘公順(円山派)、紀広成(四条派)、佐久間草偃(四条派)、宮脇素竹(土佐派)などとなっており、一見すると円山派、四条派をまとめた箇所に見えなくもないが他の場所を見ると岸派、円山派、四条派などが入り交じった所もあり、必ずしも流派ごとにまとめた掲載方法とは考えられない。また、いろは順、生年順、居住地別なども符合するところがなく、当時の京中における人気などに寄った可能性も考えられなくもない。いずれにしろ、明確な順位を知ることができない今は、本書から広成の京画壇における位置についてはっきりした情報を引き出すことは困難である。ただし、時代を重ねるにつれ、着実に掲載順位を上げていることからして、この順位には何らかの意味があるのではなからうか。

以下、広成個人の記述について若干の検討を加えるために該当の箇所を抜き出してみよう。

- 文化10年版 画の部52番目
山脇廣成 字子憲 一字士工 四条高倉東 山脇丹五郎
- 文政5年版 画の部35番目
自覚 字子憲 白名紀廣成 嵯峨天竜寺傍 山脇
- 文政13年版 画の部29番目
紀廣成 字子憲 号東暉庵 四条東洞院西 山脇自覚
- 天保9年版 画の部29番目・文人書別格2番目
紀廣成 字菩提 号既白 四条東洞院 東暉庵

紀 廣成 出画部 一号擎旭樓

ここで注目すべき点は居住地である。呉春をはじめ岡本豊彦や松村景文らの一派は、京の四条通りに住まっていたため「四条派」と称されるのだが、広成もまた画家としての人生の多くを四条界隈で過ごしたことがわかる。ついながら他の四条派の画家－豊彦・景文－の住まいを見ると、豊彦は初出の文化10年版から最後に名の挙がっている天保9年版まで一貫して「四条東洞院東」とあり転居しなかった。一方景文は、「四条富小路西」（文化10年版）、「堺町四条北」（文政5・13年版）、「四条東洞院西」（天保9年版）と数回転居を繰り返しているものの、その範囲はたかだか500メートル以内であり、「四条派」の看板通りその界隈に住み続けたことがわかる。

これら二人に対して広成は、一時期洛外の嵯峨天竜寺のそばへ住居を移している。四条から10キロメートルほどしか離れていないものの、流派の本拠地をあえて脱出したことは何か意味があるのではないだろうか。

そこで思い出されるのが墓碑にある次の一文である。

（前略） 呉之没後、上足弟子、有名相甲乙者意恥与之争能、乃舍所學（後略）

広成は呉春の没後、その弟子達が名声の甲乙を互いに争うのを見て嫌になり、今まで学んできたものを捨てたというのである。墓碑には続けて、それ以降、聖霊、夜叉、曼陀羅などを描く毎に新奇さを出すように務めた、とある。文化10年から文政5年の間のいつ転居を実行したかは明らかではないが、師の呉春が没した後（文化8年没）であることには間違いない。また、嵯峨への転居が確認される文政5年版『平安人物志』の翌年、文政6年9月の年紀が入った作品（作品一覧表No.9・図8）を見るに、四条派の描き方とは明らかに筆法が異なっており、墓碑の記述も納得できる。これらのことからして洛外への転居は、四条派から一步距離を置こうとしたことの表れと取ることができるのではないのだろうか。

以上、『平安人物志』に広成の名を拾ってきたわけだが、それ一冊だけでは個人の動向をうかがうことは難しい。本書は同じ様な形式で版を重ねているところから、違う版が複数集まると大変有効な資料となる。今後は、京画壇をカバーしていることから、それら掲載順位の意図を解き明かすことにより、全体における個々の位置を確認することができる可能性も十分に考えられる。

書画展覧への参加

江戸時代後期においては様々な「展覧」が、京や江戸をはじめ全国各地で開催された。その始まりは定かではないが、京においては龍草廬に始まり、皆川淇園（1734-1807）がその後を引き継いだという見方もある。（注4）実際、寛政4年より淇園の主催により京・東山で「新書画展覧」が開かれていたことは、彼の詩文集『淇園文集』にも見られるところであり、寛政4年から寛政10年の間に計14回開催されたことも記されている。このいわゆる「東山新書画展覧」以外にも江戸後期には全国各地で様々な展覧が開かれたことは、その際に発行された目録からもよくわかる。それらの展覧は<追善型>、<公募展型>、<個展型>などに分けることができる。<追善型>の代表としては、円山応挙の13回忌に当たり開かれた「僊斎翁追薦展覧」や長沢声雪追薦の「芦雪翁追薦展覧」、呉春没後7回忌記念の「流芳遺事」などが挙げられ、これらは故人を偲ぶことが目的のためか、遺作展のようなかたちを取ることもあったようで「流芳遺事」や「円山応震13回忌追福遺墨展覧」などは故人の作品が中心であり、他の画家から広く出品を求めることはなく、故人とその縁者の作品のみで展覧を行っている。次いで<公募展型>であるが、これは先述の淇園主唱の「東山新書画展覧」に代表される。この展覧は、毎年春秋に京の東山付近で行われたようであり、全国各地より毎回3、400点が集まったという。（注5）また、淇園没後も続けられたと見え、『皇都書画人名録』（弘化4年刊）の奥付には「今書画展覧」の運営方法が掲載されている。最後の<個展型>であるが、これは今の個展と似たようなもので、自らの作品を陳列し時には頒布することもあったようである。

さて、以上のように江戸時代後期においては様々な機会に展覧が開かれたのだが、その際には出品の目録が出されることも多く、管見に及んだ限りでも20点近くに及ぶ。（翻刻・校刊を含む）以下は、それらのうち広成の名が確認されるものを中心に、いかなる趣旨の会に関わりを持ち、どのような作品を出品していたのかを見てみよう。

「己巳展覧」

この展覧は、文化6年（1809）に紀州藩の崖南嶠とその弟子、今川忠懿と平井基光によって開催されたことが残された目録からわかる。（注6）出品件数は339件にも及び、そのうちかなりの数が紀州藩の外から寄せられており、本格的な展覧であったことがうかがえる。例えば京からは、円山応瑞や応震、景文や渡辺南岳など有名無名あわせて64件の出品が確認でき、これは総件数の約5分の1を占めている。他には江戸の谷文晁、浪花の岡田米山人、半江親子、地元紀州の野呂介石などの参加が確認できる。また、地域的にも江戸から尾張、京、浪花、岸和田、丸亀などかなりの広範囲に及んでいる。

さて、ここで広成は、

同柿樹雙鴉図同 同 廣成

と掲載されており（最初の「同」は淡彩、次の「同」は全紙、最後の「同」は京都を示す）、花鳥画の範疇に入る作品を出品している。従来広成は、羅漢など道釈人物画ばかり描いていたように思われがちであったが、ここでは四条派の一員らしく流派が得意とした分野を手がけている。現在残されている彼の作品を見ても花鳥画はわずかしかなかく、若年の頃となるとほとんど確認できていない。それゆえ、広成33歳の年にこのような絵を描いていたことを示す資料は注目に値するであろう。他の四条派の画家は、豊彦が木下応受や奥文鳴らとの合作「淡彩合製百亀図」、景文が「枇杷花雀図」、義董が「淡彩人物図」を出品している。後の二者は後年各々が特に得意とする分野で描いており、若

年の頃からそれぞれの興味の方向がうかがわれるようである。

「芦雪翁追薦展観」(注7)

本展観は、寛政11年(1799)に亡くなった長沢芦雪を偲ぶために、文化7年(1810)京・円山也阿彌で義子・長沢芦洲の主催により開催された。出品点数は全部で162幅。京はもとより江戸、三河、備中、周防などの遠方からの出品もあり、京画壇からは、岸駒、景文、土佐光孚などが、江戸画壇からは、谷文晁、文一、大西椿年らが、他には大坂の森祖仙をはじめとする一派が、備中の黒田綾山らの作品も見られる。

広成は、

初祖面壁図 山脇廣成

と掲載されている。この絵がどのようなものであったかは今となっては判然としないが、四条派にあっては仏教色が強く特異な感じがする。豊彦が「桃花牧牛図」、景文「春山帰樵図」、義董「麻姑採薬図」など花鳥・山水を基本にした四条派好みの題材を用いており、広成の独自路線がより一層浮かび上がるようである。ただしこの頃から道釈人物画に関心を寄せていた結果かというところ必ずしも現段階では断定できない。なぜなら、当展観の趣旨が故人の供養であり、単に冥福を願うにふさわしい画題を選んだ結果とも取れるからである。ふさわしいと言え、豊彦や景文らは会の開かれた季節(3月)に合った題材を選んでおり、個人の好みよりも会の趣旨や季節に適切な画題による作品づくりが優先されていたのではなからうか。

「(鈴木月橋主催)展観」(注8)

文化11年3月18日、京・円山也阿彌楼において、鈴木月橋の主催により開かれたのがこの展観である。会主の鈴木月橋については、伝記や事績もほとんどわからないものの、本展観目録の後半4分の1だけ特に岸派の画家・河村文鳳の門下をまとめて掲載してあり、その末尾に名があるところから文鳳系の画家であったことを強く感じさせる。

本展は出品者数113名。うち33名が文鳳門で占められるが、豊彦、景文をはじめ土佐光孚、円山応瑞、岸岱などの名も見られ、その他のメンバーも大半が円山、四条、岸、原の各派に属している。特に故人追薦などの看板もなく、前の2展観とは違い、出品者も京の画家に限られるようであり、出品数も100点ばかりと前者に比べるとそう多くはない。

さて、広成の出品作であるが、

太上老君像 山脇廣成

とあるように、老子を題材にした道釈人物画であったことがわかる。本展観には特に冠がなく、他の参加者は「春」にちなんだ作品を出している者が多い。例えば景文の「白牡丹図」、応瑞の「桃華鶏図」、山口素絢「桜葉小禽図」などである。ところが広成は季節には関係のない老子像を出品している。先の芦雪追薦展観の場合は、その趣旨に合致していたが、今回は特に銘打っておらず一般的な春の展覧会であり、そこにわざわざ道釈人物画を出すという姿勢には、広成の志向や意図が感じられるのではなからうか。

「流芳遺事」

文化8年に亡くなった呉春の7回忌を記念して開かれたのが「流芳遺事」(注9)と称される展観であるが、展観の目録によると展示品は個人や寺院が所蔵する呉春の作品がほとんどであり、前のふたつの展観とはかなり違った様相を示している。ここで注目すべきは2点ある。まず第1に広成がこの会に深く関わっていることが示されている点である。冒頭の「呉月溪伝」に続いて、

呉 景文士漢 編録
岡本豊彦子彦 品定
紀廣成伯道 参校

とある。「参校」とは聞き慣れない言葉であるが「参考」と同じ意味であり、ここでは両人の補佐役と言ったところであろうか。また、この会の運営に深く関わっていたことを示しているのが末尾にある主催者一覧である。

会主 呉 景文
幹事 岡本豊彦
柴田義董
僧 月静
紀 廣成
東 寅
王 百谷
山野萬寿
小栗伯圭

呉春の異母弟である景文が会主なのは首肯できるが、それ以下の門人たちの序列には何か意味があるのだろうか。まず、考えられるのが年齢順であるが、これは義董は広成よりも若いにも関わらず上位にあることから成り立たない。そうすると入門の早い順とも考えられるのだが、いずれの人もいつ呉春門に入ったか判然としない。いずれにしる広成は呉春門人の上位にあったことは間違いない。

さて2点目は、広成が所有していた呉春の絵についてである。ここに広成は次の二つを出品している。

潑墨劉海仙像 紙本高四尺 五尺闊二尺 松裕甫畫 紀廣成蔵

淡彩観音大士像 絹本高三尺八寸闊一尺五寸 紀廣成蔵

辛丑夏日為先室冥福 存允白

他の四条派の画家たちは、豊彦が「山村冬景図」「潑墨蘿菴図」、景文が「淡彩山水図」「淡彩折枝花卉図」、小栗伯圭が「山翁採薬図」「後赤壁図」「寒林呦鹿図」など師・呉春の得意とした分野のものを取り混ぜて出す中で、広成はあくまでも人物画にこだわり続けており、この頃既に道釈人物に強くひかれていたことのあらわれと取れる。

「雲烟供養展観」(注10)

この展観は、室町時代の画僧・明兆(1352-1431)の400年忌を記念して、天保4年8月23日に開催された展観である。その内容は、明兆の書画を約130幅、今書画を200幅ほど展示したと山本梅逸の跋文にある。数もさることながらメンバーも京画壇を代表する人物が揃っており、また地域的広がりもかなりの範囲に及ぶ。約半数を京の画家が占めるものの、そのほかは大坂、尾張を中心に奥州から薩摩までに至る、全国規模であったことが目録からわかる。

広成に関しては、

寒拾図双幅

殿司捨祭文図

紀廣成

陸鴻漸像

とある。注目すべきは、他の参加者がおよそ1人1件の作品を出す中で、広成は3件4点もの出品をしていることである。また、題材的には寒山拾得と陸羽という割合一般的な道釈人物画とともに「殿司捨祭文図」なる、この会のためにのみ描かれたと思われる作品をも出している。この絵がどのような図様であったかはわからないが、かなり会の趣旨を強く意識していたことがうかがわれる。もちろん他の出品者もかなりの数が道釈人物画を出しているが、広成のように特異なものは見られない。これら題材と数量からしても、広成のこの会に対する熱の入れようが他の参加者に比して強かったであろう事が感じ取れる。この時広成は57歳にして、既に「画乗要略」に見られるように、本職の僧顔負けの日々を送っていたところであり、本職に違いはあるものの、仏道と画業の二足草鞋を履いていた明兆に対してかなりの思慕の念があったことの現れともとれよう。

「墨林嘉栗」(注11)

この時代の展観は京や江戸以外でも盛んに行われたが、本展観も名古屋で開催されたことがその目録からわかる。天保8年9月に、名古屋の画家・小栗豊水を会主として開催され、出品数473点にも及ぶ大規模な展観であった。名古屋で開催されたため、尾張、三河、美濃、伊勢など近隣からの出品が目立つが、京や江戸からの参加も見られる。著名なところでは、京の豊彦、景文、貫名海屋などが、江戸からは文晁や市河米庵など当代随一の画家や書家が参加している。

さて広成は、

心戎蹲踞図全

紀廣成

と掲載されている。(全は「絹」を示す)

「心戎」が誰を示すかわからないが、「蹲踞」しているところからすると人物像に間違いはなかろう。本展観は特に何かの記念というわけではなく、出品作の画題に関しても特に制約を受けた感はなく、豊彦は「白描文殊菩薩像」、景文「雨中柳鴉図」、土佐光孚「淡彩網代守図」など思い思いの画題を取っている。そのような中で広成はなお従来通り人物像にこだわり続けており、一貫した彼の姿勢が良くうかがえる資料である。

以上、広成が関わった会の概略と出品作に基づく若干の考えを述べたが、道釈人物画を多く出していることは明確である。もちろん展観の趣旨に見合ったものを出した結果であることも考慮する必要はあるが、他の同世代四条派画家とはかなり作品傾向を異にしているといわざるを得ない。呉春在世中より道釈人物画に関心を寄せていたかに見える「芦雪翁追薦展観」への出品にはじまり、以降確認できる展観のほとんどに道釈人物画を出すような個性的な画家を流派内に抱えていた四条派の懐の深さを物語る資料である。

出版物との関わり

江戸時代中後期になると全国的に出版業が盛んになり、様々な類の書物が刊行された。そこでは文章だけではなく絵入りのものも多く、絵師の出る場面も多かった。ここでは、広成が関わった3件の出版物の概要を示しておく。「狂歌聞き徳利 竹葉集」(注12)

本書はその題名通り狂歌本であり、随所に狂歌にちなんだ挿絵が入っている。編者は聚楽庵、序が享和3年(1804)となっており、天・地・人の3部で構成されている。本書は単色刷のため豪華さはないが、各々の画家の特徴的な筆使いがうかがわれる。挿絵を描いている主な画家としては、河村文鳳、柴田義董、景文、東東洋、山口素絢、佐久間草偃、長沢芦雪、奥文鳴などが挙げられる。有名無名あわせて56名の画家が見られ、うち少なくとも6名が円山派、5名が四条派の画家である。

ここに広成は、「兜」「指し踊り」(図1)「ウナギをさばく職人」(図2)「韓信出股」(図3)の四点の挿絵を載せているが、「兜」以外は人物図である。版本ゆえどこまで原面に忠実であるかはわからないが、少なくとも後世の肉筆羅漢画に見られるような勢いある筆致は見られない。それよりも、「韓信出股」に見られるような幾分煩雑とも思える衣紋線とその鉤状の筆運びは、本書にある義董の「大黒天」と同じであり、また呉春の作品にも見られるところから(注13)四条派の人物表現の一典型をそのまま用いた結果と思われる。ゆえにこの時点では忠実に流派の「かたち」を継承しようとしていたことがうかがえ、まだ独自の画風を目指そうとしていた跡さえうかがえない。ただし、4点中3点までが人物画であるということからは、後年より一層明らかになる人物像への関心の初期的段階と見る

ことができよう。

「狂歌ふくるま」 文化6年序 (注14)

本書も前書と同様の狂歌本であり、編者は四穂園貞也、序に文化6年3月とある。ここには全部で9カットの挿絵が載っているが、最後の絵にのみ「廣成寫」とあるところから、絵は全て広成一人の手になることがわかる。画は狂歌にちなんだ題で、①土産の鮫、②夜店酒酔、③川辺夕立、④隣家落葉、⑤古戰場秋風、⑥寿木神祇、⑦月前露、⑧武士艶書、⑨懐旧如夢、のそれぞれにふさわしい図様を絵にしている。ここでは特に人物画が多いというわけではなく、全般に図様も簡略であり、絵自体から何かを読み取ることは難しい。ただ後年流派から一步距離を置いた広成が、その若年期には他の同世代の画家同様、挿絵を手がけている所からしても、絵師として幅広い仕事を受けていたことがうかがえる。

「京城画苑」 文化9年序 (注15)

江戸時代後期の京では、様々な画譜や画手本の類が出版されたが、本書もそのひとつである。全部で26人の画家がそれぞれ1カットずつ描いている。

広成は、呉春、山口素絢、原在明に続いて第4番目に掲載されている。絵は狂言を舞う人物像であるが、『狂歌聞き徳利』に見られるような筆致とは違い、おとなしい感が強く特徴的な点は指摘できない。ただ、京を代表する画家のひとりとして取り上げられたことは、当時それなりに注目に値する人物とされていたであろうことがうかがえる。以上、広成の関わった版本について概要を示したが、彼が流派から距離を置いたと思われる文政5年以降、版本の類に関わったことは確認できていない。

ここで気になるのが、豊彦・景文との差異である。現在のところ、江戸時代後期の京画壇の人々の出版への関わり方はあまり研究されておらず、その作品もよく把握されていない。このような状況下で確実なことを指摘するのは難しいが、豊彦・景文の二人は後年まで版本挿絵を手がけていることは間違いない。まず第1に天保三年(1832)刊行の『豊公遺宝図略』(上・下)が挙げられる。本書はその名の通り、豊臣秀吉の遺品について図入りで列挙・解説したものである。全部で64の項目が立てられ、およそ半数ずつ描いている。次に天保13年(1842)に刊行された、内藤蕉園『古方薬品考』(全5巻)が挙げられる。本書は植物を中心に、薬として有用なものの効能や用法を図入りで解説したものであり、挿絵は京を中心とした本職の画家によって描かれている。一例を挙げると、狩野永岳、山本梅逸、岸岱、冷泉為恭、土佐光孚らの名が見られ、総じて105名が筆を振っている。これらふたつに見られる挿絵は、先に挙げた狂歌本とは若干性格を異にしている。それは『豊公遺宝図略』や『古方薬品考』は、対象物を正確に写し取り再現することが要求され、画家の嗜好によって物体の形状を変化させる余地が与えられていない。それに対して、狂歌本の挿絵は、句の題にさえかなっていれば、画家の創作力を十分に発揮することが可能である。このようなことからして、豊彦らは広成と違い「絵」的なことばかりではなく、「実用図」的なものも手がけていることがわかる。

以上、広成の関わった版本資料の概要を示したが、当時の若手四条派画家にあって狂歌本などの挿絵を描くことはそう珍しいことではない。しかし、後年に至っても豊彦らが挿絵をこなしているのに対し、広成の名は一切見られない。このことは単に広成が四条派から距離を置いた結果のことか、または「実用図」的なことを嫌ったからなのかは明確に指摘できない。今後は、京画壇画家の出版へのかかわり方との差異を見ることにより広成の画業に対する姿勢や考えの特殊性を見ることも可能になるのではないだろうか。

4 その作品から 一有年紀作を中心に

現在、広成の作品は約50点ばかりの現存を確認したが、そのうち制作年が明らかに出来るのは15点ほどである。この数量では画風の変遷などを事細かに論じるのは難しいものの、文政年間の初期を境にして、変化が見られるのは確かである。ここでは、年紀のある作品を中心に主要なものを紹介し、画風変遷の大まかな足取りをたどってみよう。

1 「大調義順像」 寛政10年(1798) 賛 (図4)

本作品は、現時点において最も早い作例と思われる。寛政10年(1798)の賛があるところから、広成が22歳前後の作品であろう。当時の京画壇においては、円山応挙や原在中などの描いた頂相があり、そう特殊な作品とは言えないが、本来は法を受け継ぐ際に師から弟子へ譲られ、ただの記念碑的肖像画とは違い精神的に重要な意味を持つ頂相を任されるほどの技量と信用を広成はこの時すでに有していたものと推測される。

作品自身は、頂相という性格上、その表現方法には制約もあり、画家の個性を全面に表出できるものではないが、その細かな衣装の文様からは丁寧で確実な技術が、四条派特有の人物表現とは異なるその表情からは写実の技量も備えていたことがうかがえよう。

2 「唐人物図」 文化元年(1804) (図5)

この作品は本来四幅対であり、豊彦「高士観月図」、義董「牧牛図」、雪堂「赤壁図」との組み合わせで存在していた。この組み合わせからしても、当時四条派の若手トップクラスの一員にであったことがうかがえる。

さて、この広成の人物像には色濃く四条派独特の表現が感じられる。最も注目すべきはその衣紋線の表現である。着物を重ねている感じを出すためか、一番外にはかなり濃い線でもって着物の襷を描き、中の着物の衣紋線は急に薄い線を用いている。また、その煩雑なまでの描き方や線の終筆部分を鉤状で止めるところなど、これらは呉春をはじめ他の四条派画家の人物表現によく見られ、この頃は忠実に流派の表現方法を学んでいたことがわかる。

なお、本作品は現存が確認できず、色彩などは判然としない。

3 「東方朔図」 文化年間頃 (図6)

上記の作品と同様の筆法で描かれており、その使用印も同じと見られるところから文化年間ころの作品と見られる。また、広成の落款は、初期には柔らかな線で名のみを記すことが多いものの、文政年間にはいと謹直な字体で記した上に本姓である「紀」や居住地の「平安」、号の「東暉」などを合わせて使用する例が多く見られる。このことから本作品は広成の早いうちの作品とすることができよう。

衣紋線の筆法以外にも、三角形を基調とした眼の表現など、同世代の四条派画家と共通する様式を有している。

4 「維摩居士像」 文政3年(1820) (図7)

広成44歳頃の作品。前の2作品とは違い、顔の表現は四条派の類型的な表情から離れつつある。色彩の使い方も若干濃くなってきているが、やや煩雑な衣紋線に見られる濃淡の使い分けによる重ね着感の表出法はまだ歴然としており、独自の表現に至る移行期ではないかと推察される。

この作品以降本姓の「紀」が落款に使用されることが多くなる。

5 「五百羅漢図」 文政6年(1823) (図8)

広成と言えば羅漢図だけで名を残しているのが現状だが、その範疇に含まれるのが本図のような作品であろう。ここにおいては、従来見られた四条派の筆法はほとんど見られない。それに変わって全面に出てきたのが素早い筆運びによる衣紋線である。元来日本画においては線の占める比重がかなり大きく、その上手下手や個性の表出など線1本で決まることもままある。広成もそのことに着目し、自身の個性表出の手段として、あえて四条派風の線表現を排除し、このような筆致にかえたのであろう。この作品以降、人物表現においてはほとんどがこのような種類の線を用いており、ここに広成独自の表現が表れたものといえる。

なお、款記には「為呉先師冥福」とあり呉春の冥福を祈って描かれたことがわかる。

6 「七草図」 文政9年(1826) (注16)

「広成唯一の花鳥画といっても差し支えない」(注17)と評される本図であるが、別表に挙げたように数は少ないもののいくつかの蔬菜図(図9)や花鳥画が確認できる。また、江戸時代後期の漢詩人、中島棕隠の『水流雲在樓詩集』には、「紀廣成 孔雀画」と題された漢詩があり(注18)、その内容からして今日数多く見られる羅漢図とは趣の違った華麗な色彩の孔雀図も描いていた。

さて、本図は淡彩で春の七草を描いたものだが、各々の形態的特徴が描き表されており、的確な描写の技量を有していたことがわかる。また、色彩の使い方に関しても、葉脈など墨で描いた後に透明感のある着色を施しており、植物そのものが持つ柔らかさが感じられる。

7 「半諾迦尊者像」 文政12年(1829) (図10)

本作品も羅漢像であり、筆致の早い線によって衣の表現がされている。この線の表現が広成独自のものであり、後世に名を残すこととなったのであろうが、これとは対照的に羅漢の表情はおだやかな線で表現されており、一つの画面の中で緩急が同時に存在している点にも独自性が感じられる。

8 「蓮に白鷺図」 天保2年(1831) (図11)

広成と言えば道釈人物画が著名なのは事実だが、全く花鳥画を描かなかったわけではない。現存は確認できないが京都・要法寺には「花卉図」と題された障壁画があるとされ(注19)、また先述のように同時代の漢詩にも詠まれるほどの花鳥画も資料上確認される。

本図は、数少ないながら広成の手になる花鳥画のひとつであり、菖と蓮を背景にして2羽の白鷺が描かれている。題材的にはそう珍しくないが、その表現方法は特異な感がある。最も目につくのが大きな蓮の葉であり、葉脈が簡略に描かれているが、その着色の濃淡差により葉の立体感を表現しており、線よりも面的な色彩の広がりによる表現を用いている。また、色彩の具合も決して美しいとはいえない難い色を使っており、同時代の四条派画家の描く花鳥画とは印象を異にする。

以上、年紀ある作品のうち特徴的な表現が見られるものを挙げたが、これらからしても、京中から郊外への転居とおおよそ時を同じくして作風に変化が見られ、広成の人生においても画業の面においても文政年間初期は大きな境目となる時期であったことが推察される。

この他にも、有年紀の作品や制作年は特定できないものの優れた作品は多くある。例えば、道釈人物以外にも小野道風や楠正成、加藤清正など歴史上の人物像もあり、今後は画題の幅広さも検討する必要があるだろう。また、筆致の早い羅漢図とは別に割合おとなしい線でもって描いている作品もあり、作風の大きな変化以降にも幾種類かの筆法を併せ持っていたことの解明や従来よくいわれている呉道子への傾倒などの検討も必要である。さらに、今回は実見していないので触れなかったが、高野山の龍光院に所蔵される襖絵群などの大規模作も今後の検討の重要な位置を占めることになろう。

5 おわりに

以上は、広成研究の第1段階として同時代資料と幾つかの作品を挙げて概要と大きな流れを示してきたが、まだ、十分な数の作品が確認できておらず広成の画業の全貌を明らかにすることは出来ない。また、その出身母胎である四条派の研究さえ、呉春の個人研究を除いては満足になされていないのが現状であり、四条派から何を受け継ぎ、どの

ような位置にあり、何を指したのかなどを検討してゆくにはもっと大きな視野—流派ひいては京画壇全体—をもって把握する必要もあろう。さらに、本来広成の名が見られてもおかしくない資料—平安画工視相撲（注20）・僊斎翁追薦展観（注21）—や京画壇挙げての大事業であった御所造営（注22）や東本願寺造営事業（注23）などに名前が見られない理由なども探る必要があり、それらを解明できれば広成の絵画思想にまでもたどり着けるのではなからうか。

注記

- 1 土居次義『近世絵画聚考』昭和23年，桑名文星堂 所収。
- 2 広成についての資料紹介などは，画伝類を除くと次の3件を挙げるにすぎない。
①斎藤松洲「紀廣成と圓山應舉」（『筆の友』第203号，大正6年）
②「廣成」（『国華』第122号，明治33年）
③「紀廣成筆羅漢図解」（『国華』第364号，大正9年）
- 3 少々長くなるが，ここに挙げておこう。
東暉菴主紀畫師墓銘并序 貫名苞撰并書
畫師名廣成字菩提所居菴東暉平安人小好畫曾從學吳月
溪吳没之後其上足弟子有名相甲乙者意恥与之爭能乃舍所
學耽思梵文刻意寫靈聖及夜叉曼多羅諸相每寫務出新奇竟
別成一家其教導弟子不必規仿家法各順其性得畫其能故妙
年多嶄然者嗜酒恒倚醉揮酒或酣叫曹坐澳忍若狂生來不
善妻妾年六十三天保己亥八月廿三日没葬鳥邊山姪廣繁承
其後屬余墓銘銘曰
技乎依進 奮勵是由 不善通變 安出一頭
舍己所能 為人不為 觀畫相人 觀奇如奇
- 4 赤井達郎『京の美術と芸能』平成5年，京都新聞社。本書所収の「東山新書画展観」による。
- 5 皆川淇園『淇園文集』文化13年序。同書所収の「書安喜生得小幅五百羅漢図事」による。
- 6 東京都立中央図書館加賀文庫蔵。
- 7 河野元昭「研究資料 蘆雪翁追薦展観画録」（『美術研究』第288号）
- 8 個人蔵。岐阜県博物館寄託品。
- 9 田中喜作「『流方遺事』解題」および翻刻（『畫説』第61号，昭和17年1月発行）
- 10 東京都立中央図書館加賀文庫蔵。
- 11 個人蔵。岐阜県博物館寄託品。
- 12 東北大学付属図書館狩野文庫本，西尾市立岩瀬文庫本による。
- 13 呉春「芭蕉像」（逸翁美術館蔵）など。
- 14 東北大学付属図書館狩野文庫本による。
- 15 神戸市立博物館蔵本による。
- 16 佐々木丞平編集『京都画壇の一九世紀 第二巻』平成6年，思文閣出版。94ページに掲載。
- 17 前掲書，作家解説の紀広成の項。234-235ページ。
- 18 『江戸詩人全集 第六巻』平成6年，岩波書店。227-228ページ。
- 19 京都府文化財保護基金編『京都の江戸時代障壁画』昭和53年，同基金。220ページ。
- 20 『増訂古画備考 中巻』昭和45年復刊本，思文閣。1183ページ。
- 21 田中喜作「応挙十三回忌辰展観画録について」および翻刻（『畫説』第70号，昭和17年発行）
- 22 広成の生存中に行われた大規模な内裏再建は，寛政年度造営のみであるが，他にも頻繁に絵の御用があったことがうかがわれるものの，そこには広成の名は見当たらない。
- 23 文政年間に再建された東本願寺の画事に関わる資料として「文政再建御座敷御絵記」（財団法人真宗大谷派本願寺維持財団『明治造営百年 東本願寺 下』昭和53年，に所収）が挙げられ，豊彦や景文などの四糸派画家をはじめ，数多くの京の画家が見られる。

追記

本稿をなすに当たっては，石田貢氏，大阪市立美術館・鈴木幸人氏，大津市歴史博物館・横谷賢一郎氏，京都市文化財保護課・小嵯善通氏，京都文化博物館・田島達也氏，神戸市立博物館・成澤勝嗣氏，東北大学付属図書館，西尾市岩瀬文庫，水谷石之祐氏，水谷道一氏，藪本莊五郎氏，山添治樹氏，要法寺・嘉儀日有氏のご協力を得ました。記して謝意を申し上げます。



図1 『狂歌きき徳利 竹葉集』(西尾市岩瀬文庫所蔵)



図2 『狂歌きき徳利 竹葉集』(西尾市岩瀬文庫所蔵)



図3 『狂歌きき徳利 竹葉集』(西尾市岩瀬文庫所蔵)



图4 大調義順像

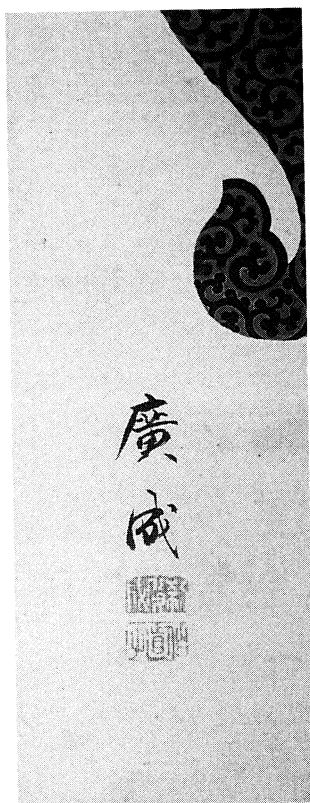


图4 落款



图5 唐人物图



图6 东方朔图

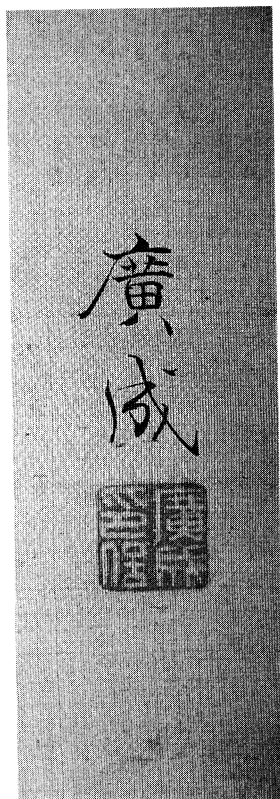


图6 落款

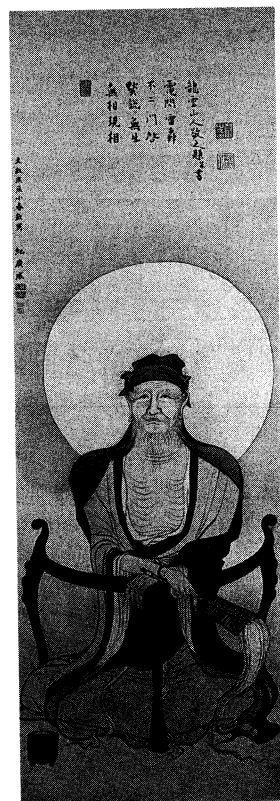


图7 維摩居士像



図7 落款



図8 五百羅漢像

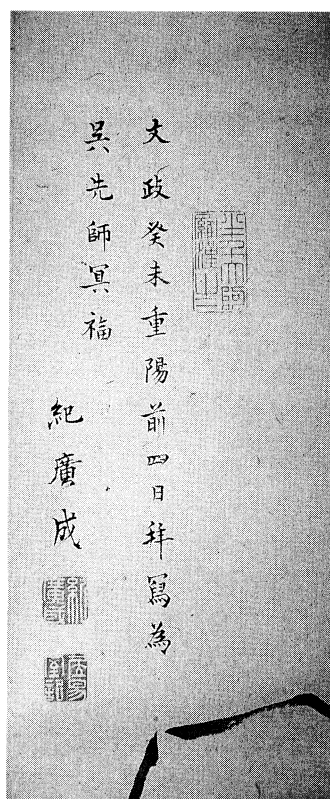


図8 落款



図9 筍図



図9 落款



图10 半諾迦尊者像

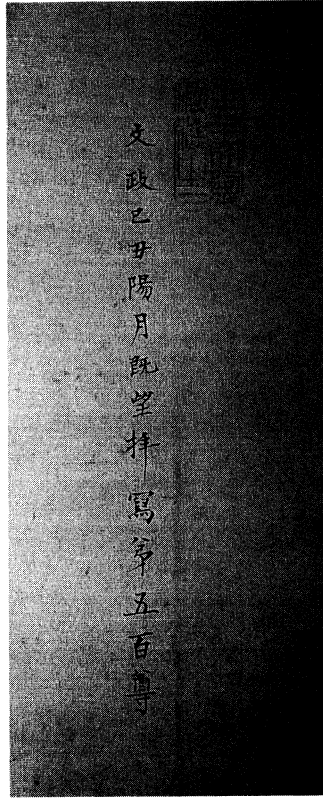


图10 落款

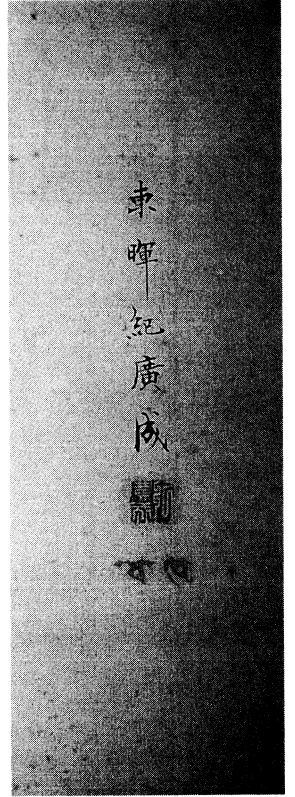


图10 年紀



图11 蓮に白鷺図



图11 落款

番号	作品名	員数	材質	法量	制作年	落款等	所蔵者	備考
1	大調義順像 狂歌きき徳利竹葉集(挿絵) ・兜 ・差し踊り ・ウナギをさばく職人 ・韓伸出股	一幅	絹本着色	一一・四×一五・四	寛政十年(一七九八)一月賛 享和四年(一八〇四)二月序	廣成	個人蔵 西尾市岩瀬文庫 東北大学付属 図書館ほか	大調義順賛 法量は表紙の寸法
2	唐人物図 狂歌ふくるま(挿絵)	一幅	絹本淡彩	一〇五・五×四二・一	文化元年(一八〇四)九月	廣成 甲子九月寫春「」	国会図書館 神戸市立博物館 ほか	哀翁衞齋亮百録 法量は表紙の寸法 法量は表紙の寸法
3	京城画苑 ・舞人図	一冊	木版単色刷	一一・六×一六・一	文化六年(一八〇九)三月序跋	廣成	個人蔵	
4	名家画譜	一冊	木版多色刷	二六・六×一八・六	文化九年(一一二二)秋季	廣成	個人蔵	
5	水汀に鶴鴿	一冊	絹本淡彩	二七・五×一九・〇	文化十一年(一一八四)跋	廣成	東京大学ほか	
6	維摩居士像	一冊	絹本着色	一〇二・二×三六・六	文政元年(一一八八)ころ	廣成	京都府立総合資料館	画帖のうち 龍雲山人賛
7	五百羅漢図(第貳百零式)	一幅	紙本墨画	一〇二・二×三六・六	文政三年(一一二〇)	文政庚辰小春欽寫 紀廣成	個人蔵	
8	七草図	一幅	絹本着色	四〇・五×五七・〇	文政六年(一一二三)	文政癸未重陽前四日拜寫為吳先師冥福 紀廣成	個人蔵	
9	半諾迦尊者像	一幅	絹本着色	四〇・五×五七・〇	文政九年(一一二六)一月	丙戌人日寫 紀廣成	個人蔵	
10	十六羅漢図	二幅	絹本淡彩	一四〇・二×五五・〇	文政十二年(一一二九)	文政己丑陽月既望拜寫第五百尊 東暉 紀廣成	個人蔵	国華一二二号
11	蓮に白鷺図	一幅	絹本淡彩	一四〇・二×五五・〇	天保元年(一一三〇)	天保元年嘉平月拜 東暉 紀廣成 (右幅) 東暉 紀廣成 (左幅)	個人蔵	
12	羅漢図	二曲一隻	紙本墨画	一一九・〇×五四・〇	天保二年(一一三一)四月	辛卯新夏 紀廣成 (右隻) 辛卯新夏 紀廣成 (左隻)	個人蔵	思文閣目録
13	羅漢図	一幅	絹本着色	一一九・〇×五四・〇	天保三年(一一三二)	壬辰臘八拜寫 紀廣成	個人蔵	
14	神通遊戯羅漢図	三幅対	紙本墨画	一一九・〇×五四・〇	天保四年(一一三三)	(自題) 神通遊戯 (右幅) (無款) 神通遊戯 (中幅) 天保四年□敬寫 東暉紀廣成 (左幅)	個人蔵	近世異色の水墨画 日本経済新聞社 国華三三二号
15	月溪呉先生像	一幅	絹本着色	七一・三×二五・七	天保六年(一一三五)	(印のみ)	逸翁美術館	
16	群魚図合筆	一幅	絹本墨画淡彩	三三・〇×三六・五	文化十二年(一一八五)以前	廣成	個人蔵	
17	源義家像	一幅	絹本着色	一一四・五×四八・九	天保十三年(一一八三)以前	廣成	奈良県立美術館	頼山陽賛
18	東方朔図	一幅	絹本淡彩	一〇〇・〇×三四・六		廣成	個人蔵	
19	涅槃図	一幅	紙本墨画	三〇・〇×五七・〇		(自題) 佛子疲於□□	個人蔵	
20	白衣観音像	一幅	紙本墨画	一三六・八×四五・〇		(印のみ)	京都・大中院	
21	靈照女像	一幅	絹本着色	一一四・八×四一・八		平安紀廣成	個人蔵	
22	張旭醉余揮毫図	一幅	紙本淡彩	一一〇・二×五九・九		東暉紀廣成書并題	京都国立博物館	
23	聖僧文殊像	一幅	絹本淡彩	一一三・三×五八・二		平安 紀廣成拜寫	京都国立博物館	
24	寒山拾得図	一幅	紙本淡彩	一一三・三×五八・二			大阪市立美術館	

